受賞者の業績

島田和子（しまだかずこ） 50歳 （保健婦・北海道）

養護教諭として活動後、東川町役場で活動開始。母子保健事業の体制・内容改善について、常に先駆者的役割を果たす。また、歯科保健に重点を置いた子育てに着目し、育児学級において子どもをめぐる食生活の改善を提唱するなど、関連事業を推進。昭和61年から幼稚園、保育所の集団ふっ素洗口を実施し、永久歯う蝕予防対策として、多大な成果をあげている。

菅原周子（すがわらしゅうこ） 44歳 （栄養士・宮城県）

昭和45年、三本木町役場に着任。以来一貫して栄養指導、食生活改善推進員育成活動を行い、地域に根ざしたユニークな企画を展開。栄養バランスを考えた弁当づくりを通し子ども自身が食の楽しさを体験する「チビッコレストラン」は特に好評を得ている。平成３年度から宮城県公衆衛生協会保健婦・栄養士研修企画委員に就任し、後進の養成にも力を注いでいる。

本間孝子（ほんまたかこ） 51歳 （保健婦・山形県）

昭和40年から、村山市を拠点として母子保健活動に尽力。三世代同居率が高く、日中の祖母育児が６割を超す同市の特性に即した初孫学級や子どもの安全教育などの事業を行う。外国人花嫁の多い地区においては、育児支援ネットワークを展開。また、子育ての環境整備を目指して、保健・医療・福祉・教育機関の連携推進にも意欲を燃やしている。

大塚好子（おおつかよしこ） 53歳 （保健婦・福島県）

「母子保健向上には『人づくり、環境づくり』を基本とすべきである」との理念のもと、農山村の山都町において23年にわたり、母子保健活動を実践。手作りテキストを活用した婚前教室や母親教室、子どもの心をはぐくむための絵本教室の開催等を通して地域の母子の健康意識高揚に寄与。さらに、小中学校との連携のもと、思春期保健にも積極的に取り組んでいる。

小林憲子（こばやしのりこ） 46歳 （保健婦・山梨県）

山梨市において母子健康管理カード、予防接種手帳の作成をはじめ、一貫した母子保健情報管理システムの確立に尽力。２か月児の全戸訪問は、母乳育児の推進、育児不安の解消に効果を示し、２か月児育児手当金支給の誘因となる。また市全域に愛育班組織を結成させ、さまざまな活動を推進。人的資源の効率的な活用の手腕は評価を得て、斯界のリーダーとして活躍中。

村本玲子（むらもとれいこ） 49歳 （保健婦・富山県）

昭和42年富山保健所に奉職。以来住民のニーズに即した、きめ細かな母子保健活動を県内各保健所において展開。小児科医、保健婦からなる母子保健グループの結成、「母子保健指導に関する手引書」・指導用リーフレットの作成等、保健指導に重点を置いた活動を実践する。一方、乳幼児健診の充実を通して、へき地の母子保健管理体制の見直しにも積極的に取り組む。

石田得子（いしださとこ） 45歳 （保健婦・石川県）

病院・保健所勤務を経て、昭和55年から松任町に奉職。当時乳児死亡率の改善を目指して、母子保健活動を基軸に母子保健推進員による健診の受診の勧奨の徹底、母親学級や妊婦・乳幼児健康相談の充実を図った。同時に「異常の早期発見」から「健全な発達を保障すること」にねらいを発展させ、さらに医療・福祉・地域の連携で地域の育児支援の体制を推進している。

海老瀬　博　子　51歳　(栄養士・京都府)

昭和44年、府下の保健所に奉職。以来、おもに過疎地域にあって食生活の改善を通して、子どもの健康増進のため活動を展開する。食環境の激変によるさまざまな問題に対し、同50年「肥満児研究会」を結成。教育委員会等関係各機関との連携のもとサマーキャンプの実施、「朝食カード」の作成・配布により、多大な成果をあげる。その活動は、全国から注目をあびる。

田　辺　美起枝　55歳　(保健婦・兵庫県)

保健所保健婦・病院看護婦を経て、昭和60年篠山町へ保健婦として着任。病院・保健所勤務当時より一貫して母乳育児を推進し、母乳育児の確立に尽力。また、「2歳児歯の健康教室」を実施、3歳児健診のう歯有病率の低下に寄与した。活動のなかで地域組織の必要性を感じ、愛育班の結成に尽力。町内全域に愛育班の結成を目指し、その育成に取り組む。

津　村　憲　子　50歳　(保健婦・山口県)

事業所保健婦・看護婦・養護教諭などを経て、昭和50年から光市の保健婦として活動。年4回開催する母親教室においては、内容の充実を図り、母親同士の仲間づくりの場として定着させた。また育児相談では7か月児相談で全乳児把握を行い、未受診者の家庭訪問を行うなど、地域に密着したきめ細かな心の触れ合いを大切にした指導は、住民の多大な信頼を得ている。

田　所　眞由美　50歳　(母子保健推進員・高知県)

母子保健推進員として8年間、乳幼児健診や各種予防接種の実施にあたり問診票の配布等を行い、地域の相談役、行政とのパイプ役としての活動を定着させた。平成元年に会長に就任、県下でも屈指の119人の母子保健推進員を誇る組織体制を確立した。また「春野町健康づくり展」においては母子保健啓発活動に取り組む等、その活動は県下でも高く評価されている。

吉田　ユリ子　44歳　(保健婦・大分県)

昭和48年、安心院町に着任。以来、20年間一貫して母と子の健康づくりに取り組む。妊娠中の健康管理の重要性が周知され、死亡率・周産期死亡率の改善に寄与した。また、４人に１人が老人の同町において母と子の心の健康が大切であると考え、平成元年から始まった愛育班員活動を地域ぐるみの健康づくりへと広め、母子はもとより住民の健康管理への意識を高めた。

大城　清子　52歳　(保健婦・沖縄県)

昭和40年に駐在保健婦として着任と同時に、母子保健の重要性に着目し、乳幼児の結核対策とともに母子保健事業の推進に取り組んだ。本土復帰後は、事業の行政移管事務の整備に尽力するとともに、母子の専門医確保が難しい離島・へき地における母子一斉健診の実施、県内で初めて思春期における保健福祉体験学習事業の導入を図るなど、積極的な活動を続けている。

今井　みどり　45歳　(助産婦・横浜市)

大都市の団地の診療所助産婦として、安全かつ自然分娩を目指す「待つお産」を心がけ、異常出産の防止に努めた。その経験をもとに、横浜市の保健所助産婦として、夫も参加する母親教室、母乳相談クリニックの開設など、地域に根ざした活動を進め成果をあげている。また外国人妊婦の保健指導、子育てグループの育成と養育ネットワークづくりにも取り組んでいる。

大平　純子　52歳　(助産婦・東大阪市)

開業助産婦としての日常業務のかたわら、昭和40年から家庭訪問による新生児・妊産褥婦の保健指導を開始したほか、母子保健推進員として地域の母子保健向上に力を注ぐ。また、助産婦学校実習生の受け入れや養成機関における教育など、後進の育成にも尽力。現在、24時間助言や技術が提供できるマタニティ・ナーシングセンター建設という夢に取り組んでいる。